

日本運動器理学療法学会トピックス

『関連する他領域との共通点と差異』

日本運動器理学療法学会運営幹事

浅田啓嗣

2020年9月1日

日本運動器理学療法学会は、整形外科手術後の後療法に留まらず、運動器の外傷や障害の発生予防およびそのための教育的指導、環境整備まで幅広く関与し、国民の健康維持・向上に寄与することを目的に発足されました。年1回の学術大会の開催、研究支援セミナーの企画運営、医師と共同した運動器理学療法に関する調査研究事業等を行っています。

【関連領域との共通点と連携】

運動器の退行性変性に伴う機能障害は、疾患の有無や種類に関わらず生じるものであり、運動・動作に対する科学的分析による身体運動の理解は、あらゆる病態を考える上での基礎となります。運動器に対する研究・介入は多くの学会・部門と共通点があり、特に理学療法評価、運動学・バイオメカニクスに関する研究に関しては日本基礎理学療法学会との連携により更なる発展が望めます。障害発生予防の教育的指導、環境整備という点では日本予防理学療法学会や産業理学療法部門との連携が期待されます。

【関連領域との差異】

関連する他領域との差異という点では、徒手理学療法部門との違いに多くの会員が興味を持つことでしょう。両団体とも運動器理学療法の発展を願っていることは同じですが、活動の内容は異なります。根拠に基づく理学療法の実践には、臨床研究の推進によるエビデンスの蓄積、エビデンスを批判的に臨床適用する能力の向上、クリニカルリーディングスキルの向上が挙げられます。当学会では主に臨床研究の推進に力を入れ、徒手理学療法部門ではクリニカルリーディングスキルの向上を主体とした活動が展開されています。

世界理学療法連盟の運動器理学療法を扱うサブグループにこのような区別は無く、本学会と徒手理学療法部門の統合が検討されていました。しかし、運動器理学療法の発展に向け取り組むべき課題は多く、まずは両団体が目的とする活動を充実させていくことが重要との結論に至り、統合は延期となりました。日本運動器理学療法学会では、医学会との連携を強化しエビデンスの蓄積を積極的に進めていきます。会員の皆様とともに運動器理学療法の発展に向けた取り組みを推進していきたいと考えています。

『若手理学療法士への期待』

日本運動器理学療法学会運営幹事

江原弘之

2020年9月1日

日本理学療法学会が分科学会に移行し、日本運動器理学療法学会は設立より8年目を迎えました。日本理学療法士学会の中でも登録会員数が多い分科学会の1つとなっています。

当学会の活動をご紹介すると、意見集約の場である学会の企画運営が最大の仕事になります。今年度の学会は残念ながら中止の決断をしなければなりませんでしたが、昨年度の第7回学会は演題数や参加者数も非常に多く、活発な議論が行われました。また学会以外には主催事業として整形外科など関連領域との研究事業や、会員向け臨床研究セミナー事業を企画しています。日々実践している症例検討を症例研究へと発展させて、学会発表にも是非挑戦してみてください。そのサポートとなるような、有益な情報や学びの場を提供していきます。

私は当学会では広報を担当しており、学会活動に接点が多かった若手理学療法士に学会の活動に興味を持ってもらえるよう取り組んでいます。理学療法の対象として有病率も高い運動器疾患は、知識や技術に関する様々な情報がネット上に氾濫しています。現在、わが国では、ソーシャルネットワーキングサービス（以下、SNS）の利用者が約8000万人いるといわれており、情報の価値や検索方法が根幹から変わり始めています。学会のホームページやメールマガジンによる一方向の情報が、SNSにより広範囲に瞬時に拡散する可能性があります。正しい情報検索やエビデンスを吟味できるスキルを身につけていただくためにも、皆さんには積極的な学会活動や学会への参加をしていただきたいと考えています。

その一方で、当学会も時代の波に適応して変わっていかねばなりません。COVID-19による新しい生活様式はオンライン・オンデマンド講義の可能性を引き上げました。動画共有サイトやライブ配信を利用すれば双方向のアクティブラーニングも可能です。新たな情報伝達手段を有効活用するため、現在準備中であります。

若手理学療法士の皆さんは、当学会ホームページの情報更新に是非注目してください。

<http://jspt.japanpt.or.jp/jsmspt/>

皆さんの活動が、これからの運動器理学療法の発展につながる第一歩となることを楽しみにしています。